

和光大学の先生たちに、
いま、きみたちに読んでほしい本を
3冊ずつえらんでもらつた。
これがその第二集。
今まで知らなかつた、
先生たちのなまの声がきこえてくるはず。
第一集と同様、
たのしく読んでください。

さて、第二集である。だが、そのまえに――

津野海太郎（図書館長）

私は歩きながら本を読む、と第一集の「まえがき」に書いた。
その『本を読もう!』第一集が刊行されて一週間ほどたつたころ、
いつものように、駅から大学にむかう川ぞいの道を本を読みながら
歩いていたら、むこうから来た女子学生に
「ツノ先生ですか?」と声をかけられた。

「うん、そうだけど」

「やつぱり。……わたし、ちょっと、先生におききしたいことがあります」

「いいですよ、なに?」

そうたずねると、彼女は手にさげたバッグから『本を読もう!』

をとりだした。

「最後のブックリストなんですけど、一冊、抜けている本があるみたいなんですよ」

私が、えつ、まさか、というような顔をしたのだろう。彼女は巻末のブックリストのページをひらいて、

『『極限の民族』』という本がどこにもないんです

「ほんと?」

あわてて私もそのページをのぞきこんだ。ブックリストは著者名でなく書名のアイウエオ順になつていて、この本のタイトルは「きょく」とはじまるから、とうぜん、「か行」のところにあるはずなのだ……。

23『宮廷の道化師』(本多勝一集9) 本多勝一

朝日新聞社 一九九四年 四、二八二円

24『キリスト教思想への招待』 田川建造

勁草書房 一〇〇四年 三、一五〇円

あれあれ、ほんとにはないや。しかもそのせいか、前後のデータまで相當にへんてこになってしまっている。デジタル化されたデータが図書館の担当者やデザイナーや印刷屋のあいだをいそがしく行き来しているうちに、どこかで混乱が生じてしまつたらしい。
「あーあ、やつちやつたなあ。ありがとう。いそいでなおしておきます」

といつたし下さいで、ただちに応急措置をほどこしました。あたらしいヴァージョンは以下のごとし。きみたちの第一集が古いヴァージョンのものだつたら、適宜、なおしておいてください。

23『宮廷の道化師』アヴィクリル・ダガン

集英社 二〇〇一年 一、八九〇円

24『極限の民族』(本多勝一集9) 本多勝一

朝日新聞社 一九九四年 四、二八二円

それについても、よくわかつたなあ。

道ばたに立つたまま、もういちど彼女の本に目をもどすと、ブックリストのいたるところに○とか◎とか☆の記号が書きこまれている。どうやら「もう読んだ本」や「これから読みたい本」のマークらしい。なるほど、これだけねつしんにつきあつてくれれば、まちがいだつて発見されてしまうわけだ。おそれいりました。

*

さて、そこで第二集である。第一集の三十一人につづき、今回は三十三人の先生方が「三冊の本」をあげてくださつた。

第一集もそうだったが、私が読んでも、「この本はおもしろそう。こんど読んでみるか」とか、「ふーん、この先生はこういう人だつたのね」とか、いろいろ発見がある。きみたちも、知的な刺激を受けたり、にやにや笑ったり、おもわずいざまいをただしたり、大いにたのしみながら利用してください。

本を読むには、その本を手にしなければならない。どうすればそれができるのか――。

カウンターの奥、リファレンス・コーナーの入り口に、そのための書棚が特設されていることは、みなさん、すでにご存じのとおり。そのほかの方針については、かんたんな手引きが第一集に用意されているので、それを参考にしてください。

きみたちに
ぜひ読んでほしい本を
三冊あげると……

伊東達夫

(経済学科)

①『社会認識の歩み』内田義彦
(岩波新書)

②『記録を残さなかつた男の歴史——ある木靴職人の世界一七九八—一八七六』

アラン・コルバン
(藤原書店)

③『萩原朔太郎詩集』
新潮文庫

①「社会」というものについて学ぼうとしても、どこから、どうやってやればいいのか。いわゆる「社会科学」の勉強方法、そんなものもあるようで、おそらくは無いだろう。だからといって、人それぞれの考え方だから、どうぞお好きなようには行かないだろう。そこでマルクス、スマス、ホッブス、ルソー等の考えに触れながら、社会科学上で得た遺産を参考にしながら、現代に生きる我々が「社会」を見る方法、歴史を勉強することと現代を認識することとのつながりを考えることができたらと思うのであるが、どうだろうか。

②原題は、『ルイ・フランソワ・ピナゴの再び見いだされた世界—無名の男の痕跡』。社会史のジャンルに入るようだが、歴史というイメージを変えさせてくれる、本当の歴史とはこういうものを言うのかなと考えさせてくれことは間違いない。それだけ何の変哲もない普通の人の歴史。でも、一人の人間を通して見えてくる家族、親戚、仕事、町、国などの風景が克明に描かれてくると、一大叙事詩にも思えてくるから不思議である。今流行りの「自分史」が書けそう。

③——「本を読もう」キャンペーンの中に、詩集を入れていいものか迷つたが。この「萩原朔太郎」、文学史上の意義とか好き嫌いとか、まったく筆者には関係ない。もう三十年以上机の上にある。時々ちょっと覗いている。決して「座右の書」とは思っていない。定価百円で日に焼けてはいるが、一種のオアシスなのかも知れない。でもこのオアシス、深さは底無し。理屈はわからない。いつも自分の話しあ手になつてくれる本があること、いいと思う。

植村洋

(表現文化学科)

- ①『ナンセンスの絵本』エドワード・リア (岩波文庫)
- ②『与謝無村』安東次男 (講談社学術文庫)
- ③『説き語り記号論』山口昌男ほか (国文社)

①はヘンな絵のついたヘンな詩とその翻訳を収めたもの。翻訳は原詩を、それが属する文化からわれわれの文化へと巧みに移植して、美事にヘンな日本語詩に変身している。耳目を注いで音読してみると、ことばの並びや音やリズムや挿絵までもが起動はじめ、それぞれえも言われぬナンセンス（無意味ではなくて、超意味）の世界を開くのがわかるはず。リアは十九世紀イギリスのナンセンス詩とナンセンス画の名人。

②は「テクストを読む」とはどういうことか、その一つのモデルを提供してくれる。燕村は江戸期の俳人・画家。イギリスの詩人キーツはシェイクスピアの才

能を称して「消極的能力」と言った。ものごとを急いで理解することに消極的な精神のことと、②の句評を一貫するのはまさにその精神。はやっぱやと見えてくる意味を押しとどめ不透明にすることで、テクスト内部に潜む動勢を表に引き出しつくる。②にかぎらずこの人の批評はどれも、そうした読みを手ほどきしてくれる。

③この手の本はいろいろ出ているが、書架のこれに敢えて目をつけたのは、この本が聴衆に向かつて“説き語られた”文化講座の講演を基にしているから。わかりやすく語られる話しことばのおかげで、当時、日本ではまだ学として成立途上にあつた文化／記号論に、みずみずしい感覚で対峙できる。当たり前と思われているものごと（例えば服装、儀礼、身振り、映画、都市など）に光をあて、その底に潜む新しい意味作用を明るみに出す手ぎわは今なお新鮮で興味深い。

大橋さつき（人間発達学科）

- ①『LD児・ADHD児が蘇る身体運動』小林芳文（大修館書店）
- ②『回想』上下 レニ・リーフエンシュタール（文春文庫）
- ③『はてしない物語』ミヒヤエル・エンデ（岩波書店）

①—「ムーブメント教育・療法」の第一人者である私の恩師の著書。学習障害（LD）や注意欠陥多動性症候群（ADHD）の子ども達の多くは、読み・書き・計算などの学習面だけでなく、はさみの使用やなわとびなども苦手とし、集団生活になじめないことも少なくない。本書では、LD児・ADHD児の特性から遊びを原点とした運動支援のあり方について、ムーブメント教育・療法の理論に基づいた実践例を紹介しながら具体的に解説している。

②—レニ・リーフエンシュタールの自伝。私が彼女を最初に知ったのは、高校の図書館で偶然見つけた写真集『NUBA』（パルコ出版局）に魅了された時。

（写真集でもよければこちらの方がオススメ本だ…）ヌバ族の躍动感溢れる身体に鳥肌が立ち、さらにその写真を撮った女性の経歷に衝撃を受けた。レニは一九〇二年ベルリン生。ダンサー、女優、映画監督と多彩な才能を發揮し、ヒトラーと出会い「意志の勝利」「オリンピア」を作成した。戦後、ナチに闘争したとして逮捕されたが裁判にて無罪。老齢になってアフリカの部族や水中写真を撮影し發表した。新たな作品が期待される中、昨年九月亡くなつた。多くの挫折を味わいながら、自身の感受性を否定しないレニの人生は多くのエピソードに溢れている。関係する作品、著書は他にもあるが、レニの「肉声」として、この自伝を紹介しておこう。

③—「モモ」とともに有名でわざわざ紹介することもないかと迷つたが、私が最初に本の楽しさを知った大事な一冊なので…。哲學的なテーマが潜んでいるが、それ以上にイメージを楽しむ本だと思う。映画を観て原作であるこの本を知つたつもりになっている人は、ぜひ読んでほしい。（全然違うから！）また、随分前に読んだ記憶のある人も、いま改めて読み返してみてほしい。時折、好きな箇所

を開いて再読するのもよし。その度に濃密な世界が広がっていくだろう。

岡本典子

(経済学科)

①『家計からみる日本経済』橘木俊詔

(岩波新書)

②『通貨の興亡——ドル時代の終焉』高橋乗宣

(PHP新書)

③『エッセンシャルアトラス日本・世界　TVのそばに一冊』

(帝國書院)

①—私たちの日常の消費行動は、一国の経済活動に占める地位がとても大きいのです。本書は、戦後、高度経済成長を遂げた日本経済の成長至上主義に潜む「ゆがみ」を、消費者・生活者としての家計の側面から見直すことで、一つの日本経済の姿を浮き彫りにしています。また、低成長下でも豊かに生きられる考え方も具体的に述べられています。消費から経済に関心を抱き、それをきっかけに経済の諸問題を考えるのに役立つ本だと思います。

②—近年TVニュース画面には、円相場でのドル、ユーロ、ポンドの刻々の表示が流れます。ユーロは、二十一世紀を目前にEUに登場した初の「合成通貨」であり、単一通貨です。初の国際的決済通貨として君臨した英國ポンド、二〇世纪前半国際機軸通貨の位置についたドル、七〇年代初頭のIMF体制の瓦解、落日のドル、ユーロの今後、円の国際化など、本書は、通貨を通じて、世界経済の仕組みの変化を知り、また今後の展望を考えるのに役立ちます。

③—「本を読もう」という趣旨から外れるかもしませんが、私は何時の頃からか「地図」を読む(見るのはなく)ことが趣味の一つになっています。今は、書店の地図売り場に行けば、多種多様な目的で編集された日本地図・世界地図帳が置かれています。また、結構幅広い年齢の方々に出会います。勿論、地図帳は上記以外にも持っています。グローバルな世界の動向を地図上から確認しておくことは今後ますます必要なことだと思います。

岡本喜裕

(経営メディア学科)

- ①『環境ビジネス新時代』 牧野昇
(経済界)
- ②『eリテールに挑む!』
(日本経済新聞社)
- ③『渋沢栄一』 土屋喬雄
(吉川弘文館)

①—地球温暖化や大気汚染等をくい止めしていくためには、政府や企業や国民が三位一体となつて協力していかなければならないが、その中で企業の担う役割が極めて重要である。牧野氏は、そのためには、従来型の動脈産業中心だけではなく、リサイクルを含めた静脈産業を構築していくことが重要であると強調している。そして、今後、静脈産業が右肩上がりの成長を遂げ、将来大きな市場と雇用を生み出すことを示唆している。

②—eリテールとは、電子小売業であり、インターネット上にバーチャル・ショッピング(仮想店)を開店し、二十四時間体制で世界の隅々にまで情報を発信し、

商品を売り込むことのできる商店である。二〇〇四年には六兆円の市場が見込まれている。

少額資本で実店舗を持つことなく運営できるメリットがあり、経営メディア学科の学生にとって一読する価値のある本だといえるだろう。

③—渋沢栄一は、一八四〇(天保十二)年に現在の埼玉県深谷市に生まれ、幕末から明治初期の日本の変革に貢献したことで有名である。フランス留学で身につけた自由民権思想をベースに、明治維新政府の役人としても仕えたが、第一銀行をはじめ数々の民間企業を育て、日本資本主義の父と呼ばれている。専門書というよりは若い人の青年が苦難に立ち向かい、次の時代を生き抜こうとするモデルとして読んで欲しい。

加藤巖

(経済学科)

- ①『フェアプレイの経済学』ステイー・ランズバーグ
(ダイヤモンド社)
- ②『ランチタイムの経済学』スティーヴン・ランズバーグ
(日経ビジネス人文庫)
- ③『テロリストのパラソル』藤原伊織 (講談社文庫)

①——「どうして?」という娘の疑問に答える形で、ランズバーグ教授が私たちの身の回りにある「なぜ」の裏側を明らかにしていきます。ちょっと過激な解釈に「目からウロコ」がボロボロ落ちることは請け合いで。経済学の素養が無くても、いや、素養が無いほうが楽しめるかもしれません。とくに知的な興奮を味わいたい人へお勧めです。

②——多くの友人がランズバーグ教授とのランチタイムが好きだった。なぜなら、教授は日常の何気ない疑問にピックリするような解答を与えてくれるから…。「シート・ベルトの強制で死者は本当に減るのか?」「どうして映画館のポップ

コーンは高いのか?」、教授の答えは私達の予測も見事に裏切ってくれます。経済学って面白いなと感じができるでしょう。これを読めば、エコノミストの思考法を身につけられるかも。

③——ちょっと疲れた中年男の島村は、秘密の過去を持つていた。ある晩下がり、彼は新宿中央公園で爆弾テロに遭遇する。爆発に巻き込まれたのは、彼の過去を知る親友や元恋人だった。その夜、島村の前に企業ヤクザの浅井が現れる。そこから彼の生活は一転していく。自分の意志とは無関係に事件に巻き込まれ、真犯人を探し始める島村。徐々に明らかになっていく眞実。史上初の江戸川乱歩賞と直木賞のダブル受賞作。文句なしに面白いです。

加藤賢次郎

(経営メディア学科)

- ①『コンテンツビジネスマネジメント』トーマツ

(日本経済新聞社)

②『トロンが拓くユビキタスの世界』吉田典之（電波新聞社）

③『ここるのチキンスープ』
ジャック・カンフイールド、マーク・ヴィクター・ハンセン（ダイヤモンド社）

①—ブロードバンドの普及、放送のデジタル化・多チャンネル化などメディア流通の拡大によって情報への需要が増加し、ビジネス価値をいつそう高めています。このビジネス目的の情報をコンテンツとして捉え、そのビジネスのマネジメントを、コンテンツプロデューサーという立場から解説し、コンテンツを誕生から消滅までのライフサイクルを切り口として整理しています。この業界でビジネスを行おうとする人は一読する価値はあります。

②—携帯電話、テレビなどのコンピュータや、銀行の預金システムやスター・コンビニなどのレジなどのネットワークシステムなど、さまざまな分野でコンピュータ、ネットワークの技術が使われています。このような「どこでもコンピュータ」時代が始まりました。その基盤を支えるシステムについて解説して

います。特に日本で開発された「トロン」を中心にはぐく成長しているユーティリティの世界についてわかりやすく紹介しています。

③—アメリカでベストセラーになつたシリーズで、実話、寓話、エッセーなどをテーマ別に集めたアンソロジーです。短い話なら一ページ、長くても二、三ページ。どこからでも読むことができるので、「一冊読破しなければ」という緊張感も不要です。各編、著者が違うので、必ずお気に入りの話が見つかります。ちょっと心が温かくなる話、元気になる話が多数掲載されていますので長く楽しめる一冊となると思います。

児島明（人間発達学科）

①『ソウルの練習問題』関川夏央（新潮文庫）

②『からゆきさん』森崎和江（朝日文庫）

③『日本人のしつけは衰退したか』 広田照幸

(講談社現代新書)

①『馴染みのない場所に身をおくと、居心地が悪い。居心地の悪さに対処する二つの方法。第一、あらかじめそのような状況に身をおくことを回避する。第二、がんばつてそれを克服する。だが、著者の選ぶ道は、そのどちらでもない。居心地の悪さにしばしば身動きがとれなくなりながら、立ちすくむ、途方に暮れる、逡巡する…。ぐずぐずと煮えきらない旅行者。しかし、この旅行者を前に、ぼくは居住まいを正す。煮えきらない態度の奥底に、カルチャーショックをいとも簡単に克服してしまうことを拒否する、強靭な意志を感じるからだ。

②—いつの時代にも、人は生きるために移動した、あるいは移動を強いられた。この単純な事実を、ぼくたちは忘れがちだ。「からゆきさん」とは、江戸時代の末から明治・大正・昭和の初め頃まで、貧困を背景に海を渡り、世界各国の娼館で働いた女性のことをいう。著者は、青春時代を「からゆきさん」として過ごした女性たちと向き合い、声にならぬ声まで聞き取り、近代日本のもう一つの物語

を、静かだが力強いことばで描き出した。グローバリゼーションがことさらに語られる昨今だからこそ、読んでみたい本である。

③—少年による犯罪がマスコミを賑わすたびに、家庭の教育力の低下が嘆かれる。昔はよかつた。家庭のしつけがもつとしつかりしていた。だから、子どもはもつと正しく育つた。それに比べて今は：「ほんとか？」本書を貫通しているのは、このような「もつともな」説明にいちいち疑問符をつけていく、「ガキの視線」だ。素朴な疑問間に立ち戻り、歴史的なデータを丹念に検証する作業を通して、「もつともな」説明がいかに根拠のないものであるかを徹底的に暴いてみせる。下手な小説を読むより、ずっとスリリングな体験ができるはず。

②『環境危機をあおつてはいけない——地球環境のホントの実態』

ビヨルン・ロンボルグ（文芸春秋）

③『クジラと日本人』 大隅清治（岩波新書）

①——インターネットの普及で、国際語としての地位が不動となつた英語を習得する必要性は高まっている。英語がある程度通じる国も多い。しかし、訪れた国の言葉を少しでも知つていると、居心地は格段に良くなる。そもそも、少しでも言葉を知ると世界は広がる。そんなことを実感させてくれるのが本書である。聞いたこともないような言語や、今は使われていない言語も含めて、実際に百以上の言語を学んできた著者が、その楽しさ、興味深さを、自らの学習経験を通じて伝えてくれる。

②——経済発展の過程で私たちの環境は悪化の一途をたどっている。人口が増加する途上国では食料不足が蔓延し、人々はますます厳しい状況に追い込まれている。このようなことをさしたる根拠もなしに、ただ漠然と信じている人が多いと

思う。マスコミや一部の知識人が、社会の悪い面にばかり光をあてて興味をひいているためだ。本書はそのアンチテーゼで、統計データを綿密に分析することにより、私たちの環境、社会、経済がそれほど悪化していないことを主張する。

③——環境を守るために、世界では数多くのNGOが活躍している。その成果に期待する一方で、多くの日本人の目からは、一種の偽善と胡散臭さを感じることも多いだろう。世界に冠たる環境NGOがもつ、この負の側面は、捕鯨問題に凝縮している。日本や欧米各国などによるかつての捕鯨が、犯罪的な乱獲であったとしても、現在の反捕鯨の動きは、科学的な根拠や異文化・異民族を思いやる冷静な判断を欠いている。本書は一方的な主義主張ではなく、客観的な事実にもとづいてそのことを教えてくれる。捕鯨の歴史もおもしろい。

- ①『遺産相続者たち』ピエール・ブルデュー、ジャン＝クロード・パスロン（藤原書店）
- ②『ベルサイユのばら』全12巻 池田理代子（中公文庫コミック版）
- ③『世界の終わりとハーデボイルド・ワンドーランド』村上春樹（新潮文庫）

①—ブルデュー（&パスロン）による、国際的に著名な著作。原著はフランスで一九六四年に出版。学校がその存続に貢献しているながら、隠蔽している不平等を明るみに出したものとして、一九六八年の大学反乱以降、大いに読まれた。学生の社会的出身の差は、学生の文化に対するかかわりを決定する。そしてそれは、個人の学業的達成さらには学生生活の送り方をも差異化する。学生あるいは大学教師が社会的にどのような存在かを、今日なお考えさせる本。

②—一九七二年に作者二十五歳のときに連載を開始し、宝塚歌劇、アニメその他で大ヒットとなつた。フランス革命を舞台として、歴史の大きなうねりとその社会的な視点をもつて歴史を描くことのできる、池田は、才能あふれるとともに、大変ユニークな、そして魅力的存在である。

中で燃え上がる愛を描いた漫画。学生諸君の母親にあたる世代の女性は、おそらくほとんどすべての人が読んでいるのではないか。少女漫画というジャンルの中で、社会的な視点をもつて歴史を描くことのできる、池田は、才能あふれるとともに、大変ユニークな、そして魅力的存在である。

③—ベスト・セラー作家は不思議な存在である。その時代を生きる多くの人びとが、「自分が実は感じていたはずのことなのにそれに表現を与えることができなかつた」と思えるようなことを表現する。だから、とうぜんその本は、一人一人が、自分なりに読むことができる。そして、読むときに感じる自分とその本の距離感が、自分と同時代の他の人びとの距離を測る指標になるのである。「ベストセラー」とは、そのような形で存在している。

塩崎文雄

(表現文化学科)

- ①『明治の東京計画』藤森照信
(岩波現代文庫)
- ②『東京都市計画物語』越沢明
(ちくま学芸文庫)
- ③『東京の「地靈（ゲニウス・ロキ）』鈴木博之
(文春文庫)

①—日本の近・現代文学は、都市〈東京〉の都市文化のなかから生まれました。上記の三冊は、そこに住まうことで人びとの意識を変革し、決定する〈都市〉のハードな顔だちがいかに造り出されてきたかを論じたものです。

三好行雄の『作品論の試み』で近代文学研究の目を開かされた私は、前田愛の『都市空間のなかの文学』で研究の方向性を見定めました。藤森の『明治の東京計画』は、都市の景観から小説を読みなおすといった、それ以後の私の方法を決定づけてくれた本です。

②—都市〈東京〉は、関東大震災と東京大空襲とによって、大きく様変わりします。

ます。越沢の『東京都市計画物語』は、ことに一九二〇年代の東京の変貌をさまざまな角度から照らし出したものです。

③—それらのグランド・デザインとは別に、都市にはそこに生活する人びとがいます。彼らのなりわいとしての借地や借家経営が、〈東京〉という都市の変貌とどのようにかかわりあつていてるかを考えさせてくれます。

それらとは別に、いまは成田龍一の『近代都市空間の文化経験』を面白がっています。

白石昌夫

(芸術学科)

- ①『芸術の意味』ハーバート・リード
(みすず書房)
- ②『フェルメールの世界』小林頼子
(日本放送出版協会)
- ③『ウォールホール日記』上下 パット・ハケット
(文春文庫)

①は学生の頃に読んだ美術史の著書で、何よりも現代美術を理解する上で良いと思います。洞窟絵画から、説き起こしていますが、我慢して読んではいるし現代美術が分かってくるはずです。翻訳者の滝口修造も、詩人で美術家でもあるので読みやすい日本語での的確な文章になっています。

②はフェルメールの好きな人が多いと思うのであげました。最近『真珠の耳飾りの少女』という美しい映画も公開されて、オランダの画家・フェルメールについて知りたいと思う人が増えたはずです。ちなみにこの映画の原作はアメリカの女流作家のもので翻訳もでています。

③は実はまだ買って間も無く、読み終えていません。が、アメリカの現代美術家アンディ・ウォーホルのことが良く分かり、当時のニューヨークのマンハッタンの街がいきいきと蘇るような気のする本であるようです。私は文庫本のこれを渋谷の本屋で初めて見、即、買ったのですが、すでに良く知られている本なのかもしません。

杉本昌昭

(経営メディア学科)

杉本昌昭

(経営メディア学科)

①『知識社会学と現代——K・マンハイム研究』秋元律郎

(早稲田大学出版部)

②『情報と自己組織性の理論』吉田民人

(東京大学出版会)

③『広辞苑(第五版)』新村出

(岩波書店)

①—ひとりの社会学者がその思想を確立していく過程を、時代と国を異にするもうひとりの社会学者が追究していった記録。学説史として第一級の業績であると同時に、現代的な課題に対する明示的・陰伏的な無数の含意をもつ。

②情報と社会との関係についてオリジナルな思索を積み重ねてきた理論家の軌跡。社会科学の各分野で理論研究を志すものには、同氏の『主体性と所有構造の理論』(東京大学出版会)・『自己組織性の情報科学——エヴォルーショニストのウイーナー的自然観』(新曜社)も必読文献。

(3) —『広辞苑』である必要はない。『岩波国語辞典（第六版）』（岩波書店）でもよいし、癖が強いといわれているが、『新明解国語辞典（第六版）』（三省堂）でもよい。とにかく国語辞典を読む。かさばつて億劫・面倒だという向きには、さいわい数多くの電子辞書が発売されている。E P W I N G形式の電子辞書など、P C上で読める各種のCD-ROMがリリースされているし、カシオやセイコーなどから発売されている携帯型の電子辞書であれば、電車のなかでも読める。とにかく国語辞典を読む。致命的な語彙力の不足を解消するためには。

鈴木岩行

（経営メディア学科）

- ①『大地の子』全4巻 山崎豊子（文春文庫）
- ②『中国企業の競争力徹底検証』安室憲一（日本経済新聞社）
- ③『日本国研究』猪瀬直樹（文芸春秋）

①—NHKのテレビドラマでも有名なので説明するまでもないが、日中戦争終結後から文化大革命を経て、改革・開放初期までの中国社会を残留日本人孤児を主人公に描いたものである。日中間の難しい関係、中国社会の複雑な構造を理解するのに有益である。テレビドラマより数十倍面白い。

②—書名のとおり中国企業の競争力を分析した本である。日本では中国脅威論が喧伝されているが、本書で中国企業の競争力はモジュラー型生産にあり、その源泉は能力・成果主義型に大きく変化した人事・労務管理にあることを明らかにしている。このことを理解すれば日本企業はいたずらに脅威論におびえることなく、対抗策をこうじることができよう。

③—小泉内閣になつてから道路公団などの特殊法人や郵政事業（公企業といふ）の改革・民営化が叫ばれているが、そのいわゆる小泉改革の原点となつた本である。この本を読むと、公企業とは無駄の塊で、官僚の天下り先にすぎず、また国会（族）議員の票集め組織であることが理解できよう。現在の数百兆円にの

ぼる累積赤字は税金の無駄使いにより作られたことを実感させられる。

瀧本晴樹

(経営メディア学科)

- ①『小説の技巧』ディヴィッド・ロツジ
(白水社)
- ②『「劇的」とは』木下順一
(岩波新書)
- ③『シェイクスピア 言語・欲望・貨幣』テリー・イーグルトン
(平凡社)

① 小説の正しい書き方、正しい読み方はあるのだろうか。それにはないと答えるべきであろう。百人いれば百通りの書き方があり、読み方がある。しかし、百人のうちの多数がある作品を面白い、または面白くないと批評することはあります。読者は様々な作品を読み重ねていくうちに作品の面白さの共通理解事項を自然に身につけていく。本著は小説家兼大学教授が実作と教授の立場から小説をより面白く読む有益な情報を与えながら、多様な文学形式の読みと創作の方法の

可能性を探っている。文学科専攻の学生諸君に特に読んで欲しい。

② 一日常に私たちは「劇的」という言葉を気軽に用いている。「広辞苑」には「緊張し、感激させるさま」と記載されている。しかし、日常的に私たちが緊張し感激すれば、それが劇的になるのかといえばそうではないであろう。著者は戯曲（文学作品といつてもよい）にはそれらを呼び起こすための仕掛け、組み立てといった法則があり、その基礎はギリシャ文学の中で構築され、法則化され現在に至っていると述べている。「劇的」とは何かと考えるうちに「人間の生きるか死ぬかの決定的な問題にまで溯ることになる」という著者の言葉にたいするくだわりに私は深く感銘している。

③ 著者はシェイクスピアの研究者ではないが、本著はシェイクスピア入門書である。しかし一筋縄ではいかない手強い入門書といえる。副題に示されているような諸問題をシェイクスピアの時代には観客が日常的に問題化していくものであるが、四百年後の私たちはシェイクスピアを解釈するために表面的になぞつ

ているだけである。例えば『ヴェニスの商人』の中で「法の精神に敬意を表しているのはシャイロックであつて、巧みな屁理屈を述べているボーシャではない。彼が裁判に負けても、彼の主張の正当性は誰の目にもはつきり立証される。」これはシェイクスピアの戯曲を越えた提起であり、本著の特色にもなつてゐる。

津田博幸

(文学科)

- ①『コーランをよむ』井筒俊彦(岩波セミナー・ブックス、または『井筒俊彦著作集』第八巻(中央公論社))
- ②『みそひと文字の抒情詩』小松英雄(笠間書院)
- ③『意識通信』森岡正博(ちくま学芸文庫)

①著者は日本の言語学の天才の一人(千野栄一元学長談)。三十を越える言語を解し、東洋と西洋の知の世界を自在に行き来して、哲学・言語学・宗教学、

いざれとも括れないような思索を続けた人。その人が現代の言語理論を駆使して聖典を読み解く。言葉を読み解くということはどういう営みなのかがよくわかる。たとえて言えば、平面にしか見えなかつた風景が、種々の方法的操作を加えることで立体になりあげくは動き出すという趣。言語理論のいろいろが頭に入る本でもある。講演なので非常にわかりやすい。なお、同じ著者の『意識と本質』(岩波文庫)『意味の深みへ』(岩波書店)などの論文集で、その文章の明晰の美と一種異様な熱にも触れてほしい。論文も文学なのだとわかる。

②この人の本を読むといつも「友だち少なうだな」とにんまりしてしまう。寿司屋の偏屈オヤジみたいな日本語学者である。その人が、平安時代の『古今和歌集』の言葉(正確には仮名文字)一つ一つをこれ以上ないというような粘り強い思考を積み重ねて解析してゆく。その思考の強靭さと柔軟さが最大の魅力。同業者への批判の言葉は苛烈をきわめ、普通に高校で教えられている「古典文法」や「和歌の鑑賞」がいかに堕落した思考の産物であるかが暴かれてゆく。古典アレルギーの人にもぜひ読んでほしい本である。同じ著者の『国語史学基礎

論』（笠間書院）は『古事記』研究者の必読書。ここまで読みこんでもらつたら太安方侶もあの世で感涙にむせぶだらうと思わせる。安価で買えるものに『徒然草抜書』（講談社学術文庫）、『いろはうた』（中公新書）などもあつて、いずれも名著。

③——インターネット時代の人間の存在様態について考えた書。インターネットがまだ「パソコン通信」と呼ばれていた時代の作だが、すでに現代の状況を先取りして描ききつている。物理的な場を共有せず、パソコン画面上の文字言語だけでコミュニケーションするとき、人と人はどのようにつながりうるのか、そして、そのとき人の実存はどのように変容するのか。こういう問題について考えている本。私はこの本で初めて「ネット・オカマ」という言葉を知った。要するにそういう問題を論じている。現代のネット上のもろもろの掲示板などを見ると、その荒涼たる風景に私などはげんなりしてしまうのだが、この本はそこに希望を見出す道筋を探り当てようとしている。本書刊行の翌年に村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』が書かれているが、あながち偶然ではあるまい。同じ著者がオウム真理教

を論じた『宗教なき時代を生きるために』（法藏館）もいい本です。

常田秀子

（人間発達学科）

- ①『拡散』大倉得史（ミネルヴァ書房）
- ②『こころの旅』神谷美恵子（みすず書房）
- ③『バツテリー』あさのあつこ（教育画劇）

①——多くの人々が高校や大学時代に、自分に対する不確かな気持ちを持つ。周囲がどんどん進学先や就職先を決めるように見える中で、自分自身は将来についての自信や展望が持てずに焦ることはよくある。このような心情を、エリクソンは「自我同一性の拡散」とよんでいる。

本書は、現役の大学院生である著者が、同時代の友人たちに対して、彼らの「拡散」の状態やその後の経過などを丁寧に聞き取りながら、現代の青年たちが

持つ「拡散」の本質的な特徴を解明しようとしている。インタビュー資料という量的にとらえがたいデータを分析した質的研究の好例である。しかし、この本の価値は研究的な意義にとどまらない。インタビューに協力した青年たちの真摯なことば一つ一つに、青年期の悩みが広く普遍的に現れていることや、拡散から抜け出し大人になることのものほろ苦さなどをしみじみ考えさせてくれる。お勧めの本。

②精神科医の著者が、人の受胎から死までのこころの道筋について、エリクソンらの発達理論をもとにしながら、平易に論じた本である。柔らかく格調高く、しかし鋭く心の真理をついた筆者の洞察が随所に盛り込まれ、読み返すごとにほつとする文にめぐり合うことができる。七〇年代に書かれたものであるが、内容は少しも古びていない。

私にとって特に印象的だったのは、「ここには喜びという栄養が必要である」という点である。著者は、遊びやユーモア、芸術、生きがいなどの重要性を、人生の様々な時期において強調している。ハンセン病者の隔離施設で長らく医師として確信に至った洞察なのだと思うと、その重さは計り知れない。

③本書は一九九六年に書かれた児童文学。主人公はピッチャーとしての天賦の才能を持つ孤高の少年。自分の投球に徹底的なこだわりと自信を持ち、妥協を認めない主人公が、中学入学直前に出会う友人や弟、家族とのかかわりの中で生きる姿が、緊張感のある文章で描かれている。

九〇年代の後半といえば、思春期の子どものショッキングな犯罪が相次いで報道され、大人たちが少年の持つとらえどころのなさに怯えた時期である。そのような時代背景の中で、思春期の少年の強烈な魅力や不安定さを伴った成長を描くことは、筆者にとつても大きな挑戦だったに違いない。児童文学の枠にとどめることができない普遍性を持ち、今後長く読み継がれることが予感される。二〇〇五年一月に六巻が出て完結することである。

皆さんは物事について「これはこんなものに過ぎない」と一方的に考え、無意識のうちに「レッテル張り」をしていることがありますか？特定の見解にとらわれずに物事を理解することはとても大事です。

- ①『日本の思想』丸山眞男
(岩波新書)
- ②『近代経済学の解説』上下 杉本栄一
(岩波文庫)
- ③『ハイエナ資本主義』中尾茂夫
(ちくま新書)

①—「レッテル張り」に陥らないためには、自分が当然だと思っていることに疑問を投げかけ、そこから問題を見出すこと、すなわち批判する事まずは大切です。個人が持つイメージや実感のみに頼つて物事を考え、それが世論を形成してしまふ傾向の強い日本社会について考える際にヒントを与えてくれる一冊です。

②—とはいえる、批判することは自体は容易です。次に、独り善がりにならないで、筋道を立てて考えて、相手に伝えること、つまり論理的に考へることが大事になります。様々な社会現象に関心を持つ方は、論理的に考へるための「武器」として経済学を学んでください。様々な経済学のテキストがありますが、この本では特定の学派や現状にとらわれずに経済学を学ぶことができます。

③—経済学の基礎知識を習得したならば、現実の経済テーマについて考へてみましょう。一九九〇年代以降、グローバリゼーションのもと、アメリカ式の思考様式や生活様式が世界中にもたらされました。この本は、アメリカが世界最大の借金国にもかかわらず、アメリカ中心の世界が維持されているカギを英語と国際通貨としてのドルの地位にもとめています。今後もアメリカの覇権が維持される一方で、経済大国としての中国の地位が高まりつつある中、我々日本はどうな選択を行えば良いのでしょうか？

- ①『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』 阿部謹也
(ちくま文庫)
- ②『歴史のための弁明——歴史家の仕事』 マルク・ブロック
(岩波書店)
- ③『クロー・ディアの秘密』 E・L・カニグズバーグ
(岩波書店)

①——今から三十年ほど前、単行本で刊行された際に読んで、私が西欧の歴史・文化で探つてみたかったのは、まさにこのような事柄なのだと感動した。本書は現在では文庫化され、地味ながら、幅広い層の人びとに読み継がれてきている。その理由は、阿部氏自身の経験と庶民の側に根ざした視点から、「まだらの服を着たおとぎ話の男」の伝説（庶民にとつての歴史）と十三世紀末のドイツの小都市ハーメルンで起こった「一三〇人の子供たちの失踪」の伝承（過酷だが、ローカルな歴史上の事件）とが結びつき、世界中の人々とに訴えかける内実を得た過程を、奥行きの深いかたちで解明しているからだろう。少し内容が複雑で難しいかもしれないが、記述は明晰かつ精緻であり、氏の凛とした志は誰にも感じ取れ

ると思う。また、西洋史に関するこの稀有な著書が生まれてきた経緯は、著者が若者に向けて書いた『自分のなかに歴史をよむ』（ちくまプリマーブックス）で平明に語られており、この本に向けて最良の導入の役割を果たすはずである。

②——現代の歴史学で重要なアナール派の創始者ブロックの遺著。この中で、彼は、なぜ歴史を知り、学ぶ必要があるのか、という問いに真摯に答えようと試みた。事実、この本の出発点となつたのは、ある少年が歴史家の父に尋ねた「パパ、だから歴史が何の役に立つか説明してよ」という問い合わせであった。ブロックは、『風景の目に見える特徴や道具や機械の背後に、冷徹な文書やそれを制定した者たちとかけ離れたかにみえる制度の背後に、歴史学が捉えようとするのは、人間たちである。そこに到達できない者は、せいぜい考証の職人にはすぎない』と述べ、過去の人間たちの心性に基づき基礎をおく全体史という構想の中に、答えを見出そうとする。そして、幅広い領域からの適切な歴史的事例を豊富に引きながら、狭量でアカデミックな考証の職人の弊害を明らかし、生き生きとした歴史の可能性を描いている。この本の場合も、現代ロシアの優れた歴史家グレーヴィチの小著『マ

ルク・ブロックの「遺言」（トランスマート）を通して、ブロックの現代的な意義を知り、本書へと読み進むのも一つの方法だと思う。

③—読者は、この本を開き、冒頭の見開き二ページに渡り、ニューヨークのメトロポリタン美術館内部の見取り図が載っているのにびっくりするかもしれない。児童文学の傑作として高く評価されている作品で、十一歳の少女クローディアとその弟ジェイミーが家出をし、二人が本質的な「秘密」を得ることを通してアイデンティティを確立し、家に戻ってくるまで過程が描かれている。ところで、この物語のユニークなのは、二人の子供たちの家出先がメトロポリタン美術館であり、この美術館をいわばもう一方の主人公として（それゆえ見取り図が欠かせない）、この中で家出をして暮らした日々の体験が、彼らのアイデンティティの獲得の経過と密接に係つて語られていることである（このところ、この作品を映画化したものがテレビでしばしば再放送されており、二人の子供に「秘密」を伝授する富豪の老婦人フランクワイラー役を演ずる往年の名女優イングリッド・バーグマンの演技が素晴らしい）。

また近年、カニグズバーグ作品集が刊行（岩波書店 二〇〇一～二年）され、彼女の数々の傑作が纏めて読めるようになった。その中には『誇り高き王妃』、『ジョコンダ夫人の肖像』（いずれも第四巻に所収）など、ヨーロッパの歴史・文化に関する作品も含まれ、これらの作品は、①、②で挙げた歴史家たちと共に通する視点から、興味尽きない歴史物語をとても面白く平易に描き出しており、これらもまた必読書に加えてよいだろう。

野々村文宏

（表現文化学科）

- ①『限界芸術論』鶴見俊輔（ちくま学芸文庫）
- ②『日本文化私観』ブルーノ・タウト（講談社学芸文庫）
- ③『日本文化私観』坂口安吾（講談社文芸文庫）

①—日本のマンガ・アニメが海外に輸出され、OTAKU（おたく）は多くの

国で知られる言葉になつた。ただ、ちょっと待て。アメリカで哲学を学んだ鶴見俊輔は、一九五五年頃からこんな事を考えはじめていた。ヨーロッパやアメリカで言うART、つまり純粋芸術の概念は、もともと日本には無い。かといって大衆芸術でもない、いわば「第三の道」は無いものだらうか。そこで鶴見が考え出したのが、芸術と生活の境界線上にある「限界藝術」の概念だ。でも、限界とはLimitではない。Marginal、つまり「へりにある（もの）」だ。そこだけ一瞬わかりにくいか、鶴見の考え出した枠組は現代日本でもまだまだ有効だ。

②—ドイツから日本に亡命してきた建築家のブルーノ・タウトは、桂離宮や伊勢神宮に日本の美を見出した。われわれが自明のものと思つてゐる日本文化や日本の美は、このように、外国人の眼によつて発見され定義されることが多かつたのだ。でも、それつて本当の伝統だらうか？ そもそも、伝統つてなんだらうか？

それよりなにより日本つて？ 日本文化と伝統について考えるときに、まずは読んでおくべき本のひとつだらう。

③—そのタウトに真っ向から反逆した、パンク小説家ANGO。桂離宮なんて、俺、知らないぜ。でも、誤解しないでほしい。安吾はただの無知として開き直つてゐるわけではない。日本人はいつも着物を着てゐるわけ？ とたずねているのだ。祖国の伝統をぜんぜん知らずネオンサインとジャズしか知らないANGOにも、現代（＝その当時の）日本文化を語る資格はある。そもそも伝統が「発見」されるなんて、うさんくさいじやないか。ただし、タウトの本と両方読まないと効かない。しかし、これ、昭和十七年に発表。つてことは戦時中。相当やばいぜ。

長谷川義正

（経済学科）

- ①『開発経済学入門』 渡辺利夫（東洋経済新報社）
- ②『勧工場の研究』 鈴木英雄（創英社）
- ③『それから』 夏目漱石（新潮文庫）

①——この本からは、開発経済学の基礎的な知識と勉強の仕方、途上国経済を学ぶ際の大切な骨組み、そして世界の中の途上国の経済的状況を好転させ、深め、考えるかの道標が読みとれる。途上国研究が半世紀の歴史を重ねた今も、確定的な「途上国諸国の経済学」がないといえる。二十一世紀、「開発経済学」の類書は多く出版されるようになった。「開発」とは、どんな意味があるのか、これからは「開発」という名称の「経済学」でよいのか、考えて本格的な専門の途につこう。

②・③——「経済経営系」の学問を身につけてみたい。しかし、なにやら、目標が定まつていない方に勧めたい本がある。経済経営の分野は、理論的・歴史的・政策的な分野がある。これらの根底には、「くらし」の色合いやかたちがある。「経済経営学」を修めるために専門の勉強や研究をするのは、当たり前の前向きの姿勢である。その前向きの姿勢を大切に少しばかり角度を変えてみて勉強・研究に励んでみたらどうか、というのがこの二冊である。デパートの発祥の地はアメリカ・ニューヨークでは!、日本の明治時代には今までいうデパートは「勧工場」

場^ば——と呼ばれていた。③に出てくるのが、この「勧工場」である。当時の人々のくらしは小説でもあるが、「文学」と「経済経営」の分野も緊密に結びついている。「経済経営学」の「タネ」は、普段のくらしや書物の中にも、一杯、ある。この二冊の関係はひとつの一例に過ぎない。この例は、日ごろから好奇心を持つこと、一つのヒントが広がりを持つことの可能性、さらにヒントをいかにしたならば、具現化できるかを提示してくれる。

林真一郎

(人間発達学科)

- ①『さぶ』 山本周五郎 (新潮文庫)
②『青春漂流』 立花隆 (講談社文庫)

- ③『失われし自我をもとめて』 口口・メイ

(誠信書房)

①——二十二歳で読んで、その後、何回か読み返した。団体職員の数年間、職場を

牢獄のように考えていた私には直球の手ごたえを感じた小説であった。江戸の表具職人さぶ、同門の職人で同い年の栄二。愚鈍なほど純朴なさぶに対し、栄二是男前で頭が良く仕事の腕も立つ。無実の罪で石川島の人足寄場へ送られた栄二は、心を開かず、罪を着せた者たちへの復讐ばかりを考えていた。やがて自らを変え、周囲からも一目置かれる存在になっていく。最も心熱くさせられたのは暴風雨が寄場を襲う場面だ。一時釈放するという奉行の温情を受けず、栄二たちは力を合わせて寄場を守りとおす。そして、ついに栄二はある洞察に至る。こうしてみると、栄二の人間的成長が前面に出された小説だ。だが、題名は「さぶ」である。なぜか。栄二のはからいを超えたさぶの純朴さを山本は描いたのか。ジタバタ生きていた私は「凡人」としての栄二に同一化して読んだ。

②初出が一九八五年だから二十年前になる。当時、若くして一流となつた十人に立花が会い、青春時代に彼らが何を考え、何をしていたのか、じっくり聴いていく。そのインタビュー記録である。立花は十一人の話と若き日の弘法大師空海を比較して、ある共通点を抽出し、それが青春をよく生きるための鍵だとい

う。たしかにそうだと思い、私もそのように生きようとした。中でも精肉職人、コック、ソムリエの物語が好きで、なぜか食品関係者ばかりだった。

③新版の表題は「失われし自己」をもとめて」。メイは実存主義的な心理療法家である。私が心理学に偏向するきっかけになつた一冊であった。「第四章 存在への闘い」では、母子関係を超克して「自分自身」を生きる決意をするオレステス神話が紹介されるが、エディップス神話よりも現実味があつて、よほど納得できた。もし、今まさに心理的自立に悩む人が読めば、奮い立つほどの勇気がもらえるのではないか。私はこれを読んで家を出た。

原田尚幸

(経営メディア学科)

①『デパートを発明した夫婦』鹿島茂 (講談社現代新書)

②『エスキモーに氷を売る』ジョン・スポーツトラ (きこ書房)

③『公共サービスのマーケティング』

ジョン・クロンプトン、チャールズ・ラム（遊時創造）

①—黒船が浦賀に来航する一年前の一八五二年（嘉永五年）、フランス・パリに世界初のデパート「ボン・マルシェ」が誕生した（現在も営業中）。創業者であるブシコー夫妻の消費者を誘惑するアイデアと経営戦略は、前例がなかつたという点でまさに発明と呼ぶにふさわしく感動すら覚える。現代では当たり前となつたこれらの戦略が、日本の幕末から明治初期に導入されていたことにも驚かされる。「経営とは何か」を学ぶ入門書として、最適の書である。

②—タイトルに惹かれて手に取ると、スポーツビジネスを題材にした書であった。この書は、NBAで観客動員数が最下位だったチームを「ジャンプ・スター・マーケティング」の原則を用いて、チケット収入伸び率一位に躍進させた社長兼CEO（著者）のドキュメンタリーである。この書を読み終えると、自分でプロスポーツチームのGMが務まるのではないかと勘違いしそうになる。もち

ろん、現実はそれほど楽天的ではないのだが…。

③—私が最初に出会ったマーケティングの専門書。この分野の大家の書より理解しやすい入門書。手垢にまみれ、背表紙がボロボロになるほど使い込んだ。一九九〇年代始めに行政などの公共機関や非営利組織（NPO）のマーケティングについて書かれている点も注目に値する。この書で学んだ「顧客志向のマーケティング」は、私の思考の原点であり、武器となつていて。刊行から十年以上経過した現在でも充分に通用するテキストである。

柊光紘

（芸術学科）

①『モダン・デザイン全史』 海野弘

（美術出版社）

②『ユートピアだより』 ウィリアム・モリス

（晶文社）

③『私編岡上風土記稿』 鈴木勁介

（八月書館）

①—デザインという言葉が日常会話で使われ、デザインされたモダンな空間が私たちを取りまいている。このモダン・デザインというイメージの形成を巡って、一八三〇年代の都市社会の成立からアルヌーボーや構成主義など、目まぐるしい変容を経て現代にいたる一七〇年余の流れを、多くの写真や文献資料をあげながら解説した本である。通読するとモダン・デザインとその背景にある社会や文化の関わりが史的に、そして一举に理解できる。でも読みやすい文体とはいえ六百ページに近い大著なので一気に読もうとは思わず、目次から時代や様式をひろい読みするのもいいし、索引を使ってデザイン辞典代わりにも利用するのもいい。デザインに関心がある人には本棚に置いてほしい一冊だ。

②—（競走馬やロック・バンドではありませんよ。）イギリスのアーツ・アンド・クラフト運動を先導した工芸作家モ里斯のユートピア論。彼が創造の根拠とした中世社会をモデルに未来の理想郷を描いているのだが、たまたまその時代設定が二十一世紀初頭、「いま」である。学生時代この本をきっかけに、ユートピア本やディストピア（反ユートピア）本を読みあさっていた。ただ、岩波文庫

（松村達雄訳）で読んだので「生活に根ざした創造」とか「創造の喜びこそが労働の報酬」という言葉にひつかかっていたのだが、昨春出たこの新訳（川端康雄訳）で読み直すと、いま話題のスローライフも絡んで、素朴で基本的な田園共同体と活気に満ちた人々、生き生きとした工芸職人、手仕事のもつ人間性、といった示唆が印象に残った。読みとるものが多い本である。

③—大学の東向かいの丘陵・岡上を長年かけて歩き、新旧の住民からの聞きとり調査を重ね埋もれかけた地誌や文献資料にあたって、その成立の経緯や寺社の故事、季節行事、かつての暮らし方などを丹念に掘り起こしながら、大学が所在する飛び地岡上のたたずまいと風景を書きだした本である。いま各地の大学で地域との関わりを指向しているが、この本はそうした試みにたいしてひとつの方針を示していると言えるだろう。昨春退任した鈴木勤介さんの本なので、読んでもいる人も多いだろうが、四年間通う大学が所在する地域なので、時間が空いた時などにこの本を手に散策してみるのもいい。見返しに地図がついているので格好のガイドになると思う。川添修司さんの挿し絵も楽しい。

- ①『夜と霧』ヴィクトール・E・フランクル (みすず書房)
②『仕事のなかの曖昧な不安』玄田有史 (中央公論新社)
③『13歳のハローワーク』村上龍 (幻冬舎)

①—高校生の時に読んだのは旧版の『夜と霧』。ナチス収容所の恐怖と狂気が印象的でした。その後、英語版に接してじっくりと内容を読み込むと、収容者の人格を全て剥ぎ取り、最後には自ら死まで受け入れさせる収容所という極限状況のなかでも、内的な支えがあれば、最後の一片の精神的自由や倫理観を失わずに生きることができるという事実が心に残りました。人間性を恥ずかしいほど愛おしく感じたものでした。

"The best of us did not return." (英語版は "Man's search for meaning.")

②—社会科学の分野では昨今めざらしく読ませる文章と評判をとった本です。

若者を巡る労働市場の現状について専門的な道具を使使しつつ、なぜ仕事がなくなったのか、フリーターのどこが問題なのかといった問題を分かりやすく丁寧に説明しています。若年者を元気づけようとする筆者の熱い語り口には共感を抱くはずです。「経済学者でもこんなよい文章が書けるのか」と評された本書を手に取つてみてはいかがでしょう。お薦めします。ついでにこちらも。『ジョブ・クリエイション』玄田有史著 (日本経済新聞社)

③—筆者の次の文を読んで少しでも感じるものがあれば是非この本を経験してください。「わたしは、仕事・職業こそが、現実という巨大な世界の「入り口」なのだと思います。わたしたちは、自分の仕事・職業を通じて、世界を見たり、感じたり、考えたり、対処したりすることができるようになるのです。自分の仕事・職業によって世界と接しているということです。」

深沢眞一（文学科）

- ①『芭蕉研究の諸問題』今栄蔵
(笠間書院)
- ②『日本のことば遊び』小林祥次郎
(勉誠出版)
- ③『鈴の音が聞こえる　●猫の古典文学誌』田中貴子
(淡交社)

①—専門的な芭蕉研究書です。基礎知識なしに読んでも大部分はわからないと思ひます。でも、第六章「芭蕉の真蹟とその摸造品」は、芭蕉の筆跡とされる短冊や懐紙の図版を掲げて、コレハホンモノ、コレハニセモノとすばりすばり快刀乱麻。ニセモノを見分けるポイントを指摘してくれて、推理小説の謎解き場面のようです。第九章「蕉句句形誤伝考抄」は、その推理小説の芭蕉発句版です。芭蕉作品が、どのようにして誤った形で伝えられてきたか、その誤伝発生のプロセス解明は目から鱗。

②—とにかく用例の豊富な本です。あれこれ言わずクイズ形式で引用しましょ

う。(1) 明治の頃「アイスクリーム」という隠語は何を指したか? (2) 江戸時代、錢湯の看板には矢が一本入り口に出されていた。なぜか? (3) 「と」と一文字書いて「へちま」と読む。なぜ? (4) 『徒然草』にある恋の歌「二つ文字牛の角文字直ぐな文字ゆがみ文字とぞ君はおぼゆる」はどういふこと? 答えはそれぞれ、この本の (1) p90 (2) p122 (3) p217 (4) p226参照。

③—この本は「日本古典に描かれた猫を網羅する」目標を持つて書かれました。おのづから、「日本人と猫」の生活文化史となっています。江戸時代の初めまで、猫は繋いで銅うものでした。そこから『源氏物語』の一シーンの解釈が深まります。神奈川県の金沢文庫あたりには鼠を捕るのととても優秀な猫が多く、「金沢猫」と呼ばれていました。江戸時代、猫のえさの器はアワビの貝と決まってました。そういうえば夏目家の名無しの猫もアワビの貝でえさを食べてましたつけ。

福田好裕

(経営メディア学科)

- ①『仕事常識 新・オトナの学校』日本経済新聞社（日本経済新聞社）
- ②『ロックする哲学』澤野雅樹（洋泉社）
- ③『左利きは危険がいっぱい』スタンレー・コーン（文芸春秋）

専門（経営学、特に経営管理論、組織論、経営戦略論）に関する本は、講義・ゼミ等で機会あるごとに紹介しているので、それ以外の本を紹介します。

①一本書は大学の授業の中ではたぶん教えてくれない、少なくとも体系的には扱うことのない「働く上でオトナの人々が身につけているであろう常識」について書かれています。会社の中で働く人はもちろんのこと、会社との関わりの中での働く人びとにとって必読の本です。このような「常識」は早いうちから身につけていたほうがいいと思います。「茶髪の基準」などの項目があります。専門以外の本を紹介しますといいましたが、これは唯一広い意味で専門に関わる本です。

講義での「ネタ」にもしています。

②私は単純にロックが好きだ。CDを聞いたり、コンサートに行ったりするだけでなく、ギターやベースも弾く。それと同時にロックについて書かれたものも読みます。CDのライナーノーツやハードロック／ヘヴィメタルマガジンの『Burn!』その他の音楽専門誌をよく読みます。本当ならばそれらの雑誌を紹介したいのですが、単行本をということで、本書を紹介します。本書のようにロックを扱うと、まるで高尚な音楽のように思えてきます。私の生涯の課題は『ロックする経営学』をまとめることです。Keep on Rocking!!

③講義を受けている皆さんには知っていますが、私は左利きです。板書のみならず箸もギターも左です。「左利きは右利きにくらべて九年も寿命が短い！」という説をカナダの心理学者がまとめたものが本書です。世の中の大半の道具・設備は右利き用にデザインされていて、元来左利きには扱いづらいようできている。とつさの時には、反応が遅れ、事故を起こしやすい。また、ある種

の疾病やアレルギーも左利きの人に多い。それらが原因で寿命が短いとしています。これ以外にも、神話の中の左利きや遺伝などに関しても述べられています。ちなみに八月十三日は世界的に「左利きの日」です。

松村一男

(イメージ文化学科)

- ①『ヨーロッパ退屈日記』伊丹十三
(文春文庫)
- ②『グリム童話集』(全5巻)
(岩波文庫)
- ③『羊の歌』(正・続) 加藤周一
(岩波新書)

図書館からの執筆依頼には専門の本を選べと書いてあるが、ボクが一応専門にしている神話学の本なんて、いきなり読んでも面白くない。だから神話と無関係だが、大学生の頃に読んで後々まで影響を受けたと思う本を挙げる。

①はとにかく面白かった。伊丹十三は国際的な俳優で、イラスト레이ターで文章も面白いというマルチ人間。本の中のイラストもすべて本人が描いている。一番すきなのは、「湯煙の立つや夏原狩の犬」という一句の出てくる日本人の唄う英語の歌についての考察の部分。読んだ人はきっとみな、「ああ、あれか」と思って、膝を打つだろう。訳が分からないう人は、まあ読んでみてください。

②はあまりに有名で紹介する必要もないだろう。これは増補された最終版だが、最近はもつと話の数の少ない初版の翻訳も小学館文庫から上下二巻で出されている。初版の方が読みやすいが、ボクが学生の頃にはまだ出版されていなかつたので、岩波文庫で読んだ。ワンパターンでアホみたいだが、ほとんどの場合に似たような話が世界中にあるので、そこからいろんなことが考えられる。

③自伝を新書のような知識を手軽に提供する形態の本に入れることは何事だとかつてのボクは怒り、久しくこの本を無視していた。しかし、読んでみるとその生き方や考え方、そして文体にまでも魅了されてしまった。その後『日本文学史序

説』（現在は、ちくま学芸文庫）も読むに至つて、ボクは半ば崇拜者のようになつた。まあ、今はそんなことはなくなつたが、それでも物事を考える際に、今でも時々思い出す言葉がある。たとえば、「三分で解らなければ、三時間かけても解らぬだろう」とか。

矢田秀昭

（人間発達学科）

①『スポーツ科学・入門』別冊宝島編集部

（宝島社文庫）

②『最新コーチング読本——コーチの心理学』武田建

（ベースボール・マガジン社）

③『こんな凄い奴がいた』長田渚左

（ベースボール・マガジン社、文春文庫）

①——「うまさ・強さのサイエンス」「スポーツとからだの最新理論」「自分に合つた体力アップの最新ノウハウ」「本当のスポーツの姿」と、運動を自分に合わせてできるように、プログラムの作り方・実行の仕方をわかりやすく解説して

ある。さらに、興味深い最新のスポーツ科学の成果も集めている。具体的かつ実践的に追求できるようにまとまっている一冊である。

②——著者は大学・高校のアメフト部を全国優勝に導いた名監督である。自身の経験や心理学の専門知識に基づいた理想の指導方法を提案している。選手とのコミュニケーションの重要性とその方法を紹介している。「こんな指導をしてみませんか」「指導に役立つカウンセリングの知識と手法」をもとにまとめられた指導教本である。人間関係の問題解決のヒントが見つかるかもしれない。

③——一九二八年に開催されたアムステルダム・オリンピック以来、オリンピックでは多くの日本人選手が活躍している。総勢三十八名のオリンピアンたちの活躍のエピソードがテンポよくつづられている。また、一九八〇年西側各国が不参加したモスクワ・オリンピックにおける日本や各国の動き、日本人選手にも視点をむけている。歴代のトップアスリートの活躍が時代を超えてよみがえる。

山崎秀雄

(経営メディア学科)

- ①『経営者の役割』C・I・バーナード（ダイヤモンド社）
- ②『イノベーションのジレンマ——技術革新が巨大企業を滅ぼすとき』

- ③『ザ・ゴールド——企業の究極の目的とは何か』

クリエイション・クリステンセン
（翔泳社）

エルヤフ・ゴールドラット
（ダイヤモンド社）

①——「近代組織論の父」と呼ばれるバーナードの古典的名著。組織成立・存続の要件、権威、無関心圏、組織の有効性・能率など、現代の組織論の基礎をなす概念が「宝の山」のごとく散りばめられている。ゆえに本書は、読むたびごとに新たな発見がある。経営学はそれを学ぶ人の人間的な成熟度（マチュリティ）を反映する学問といわれるが、そのことを最も実感できる一冊である。ただし、難解。『バーナード 経営者の役割』（飯野春樹編、有斐閣）などの解説書で十分肩慣らしをしてから、本書と格闘してもよかろう。

②——「優良企業が失敗するのは、顧客の声に耳を傾けるからである」。イノベーションの重要性が声高に唱えられる現代、業界のイノベーターとなつた企業が、イノベーターであるがゆえに抱えるジレンマを独自の視点で分析し、その解決策を提示。血の通つたマネジメントを考えるには少々物足りなさを感じるかもしれないが、新しい戦略論的な視点を求めている人には「目からウロコ」のヒントが随所に転がっている。今流行のMOT（技術マネジメント）に関心のある人には必読書であろう。

③——理論書ではなく「小説」である。「全体最適」「TOC（制約の理論）」などの考え方方が直感的に理解できる。また、小説としても読み応えがある。トヨタ生産システムなどの生産管理やサプライチェーン・マネジメントに関心のある人に、とくにお薦めしたい。あくまで噂の域を出ないが、八〇年代に米国で二五〇万部のベストセラーになりながら、日本の産業競争力がいつそう強化されるからという理由で約二十年間、翻訳が許可されなかつたともいわれる「いわくつき」の一冊である。

- ①『選択の自由』ローズ・フリードマン、ミルトン・フリードマン（日経ビジネス人文庫）
②『ベッカー教授の経済学ではこう考える』

③『坂の上の雲』全8巻 司馬遼太郎（文春文庫）
　　ゲーリー・ベッカー、ギティ・ベッカー（東洋経済新報社）

①—経済学を勉強すると、価格は需要と供給によって決まるとか、競争市場がもつとも効率的であるといったことを学びます。しかしながら、実際には価格はどう決まっているのか皆目わからないし、実際の市場は寡占的であったり、独占的であったりします。本書は競争市場および自由経済がいかに効率的かつ経済的厚生を最大化するのに適しているということを、具体的な事例を挙げて解説しています。経済学徒にとっては必読書です。

②—教科書で学ぶ経済学は、基本的であるが故にあたかも現実経済とは乖離しているかのように見えることがあります。しかし、この基本的な経済学理論（例えば、需要曲線と供給曲線）を使うと、非常に切れ味のよい現実分析をすることができるのです。経済学は「社会科学の女王」といわれることがありますが、それは切れ味のよい分析用具を数多く備えているからです。ベッカー教授は本書で切れ味のよい現実分析を展開しています。

③—今年は日露戦争開戦から百年目にあたります。十九世紀の半ばに開国した日本は、西欧列強に追いつき追い越せとばかりに、「富国強兵」「殖産興業」などのスローガンのもとに猛烈な近代化を追求してきました。この小説は伊予松山の三人の青年の姿を通して、その近代化に至る日本の姿を描いたものです。兄の秋山好吉は日本陸軍の騎兵隊の創始者、弟の秋山真之は日本海海戦の作戦參謀、そして友人正岡子規は日本の近代歌壇の改革者。

「読む本は、いま展開している旅の風景を大いに裏切るがいい」（辺見庸『反逆する風景』、講談社文庫）。「旅の風景」を「授業」や「専門」を置き換えて、恣意的に勧める三冊。

①『不安の世紀から』辺見庸（角川文庫）

②『幻燈辻馬車』上下 山田風太郎

（ちくま文庫）

③『幻談・観画談』幸田露伴

（岩波文庫）

①—戦後五十年目の一九九五年は、阪神大震災とオウム真理教事件が起きた、特異点のような災厄の年だ。本書は、この翌年に放映された「辺見庸・対論ドキュメント」を元に書籍にしたもの。対談の相手はアメリカの学者、スペインの作家、旧ユーロ出身の映画監督。また辺見の『ゆで卵』（角川文庫）は、小説という形式による卓抜なオウム私的事件簿。

辺見庸の発言・思考が、徹底して「私」の身体性に垂鉛を下ろし、「内なるオウム」や「みえない内乱」をあぶりだすなら、自然性と超自然性、実在と非実在の敷居に立つて、「人間」と「近代（史）」のアイデンティティに異化作用をもたらす傑作が以下の二つ。

②—孫娘を乗せた元会津藩士が驅る辻馬車のゆくところ、自由党の壮士あり、文人あり、嘶家あり、幽霊ありで、数々の事件に巻き込まれていく。この本が刊行された一九七六年、私は『寺小屋教室』という私塾にて「日本における思想形成」をテーマに、明治維新なんぞも勉強していた。映画人で金があつたら、『幻燈辻馬車』を絶対に映画化したい、と夢想したものである。（いや、今でもだが。）

この本は、「声」の聞こえてくる希有な小説だ。辻馬車に揺られながら、三遊亭円朝の怪談嘶も聞いて？みませう。読後には、別風味の山田風太郎『戦中派不戦日記』も読んでみませう。

③「露伴」といえば、『五重塔』を書いたお堅い文豪じゃないの？ いやいや。この明治人の驚くべき博識・批評眼は、評論や論考にいつそう見事に結晶化しているのを知り、金も無いのに、無理をして露伴全集を買ったのはいつだつたか…。あげた本は、晩年の傑作です。流麗・洒脱なる文体が描き出した綺想の世界に入り込めずに引き返すのか、はたまた魅了され、虜となるか……。おそらくどちらかでしような。深入りするかもしれない少数者のために、『連環記』（岩波文庫）もあげておきます。

口バート・リケツト（人間関係学科）

- ①『みみず物語——循環農業への道』小泉英政（コモンズ）
- ②『民が代 斎唱——アイデンティティ・國家・ジエンダー』鄭暎惠（岩波書店）
- ③『物語・日本人の占領』津野海太郎（平凡社ライブラリー）

①——三十数年、有機農業を生き方とした一農家の物語。循環農場で、みみずから知恵を借りて人生のナゾを探り、その土に深く肥沃に根をおろす姿。成田

空港の脇、低高度にジェット機が屋根の真上を通るさなか。空港反対の中で非暴力を主張し、現在、その思想を循環農業に生かしている。かつて、ベトナム反戦デモで座り込んだとき、権力・政治の「憎悪の哲学」への対応の仕方として、こう謳った。

すわりこむと

ごみがよく見える

すわりこむことは

ごみの低さに

近づくことだ

ひとりの人間の生き方に不思議な力や魅力を感じさせる、手にとりやすい本。

②——「女」・「男」、「日本人」・「在日朝鮮人」、「白人」・「黒人」等々、他者と自分との「不連続」をもたらす二分法的なアイデンティティ形成がもつ差別性。本

書は、フェミニズム、マルチカルチャラリズム、民族、難民、混血などをキーワードに、「自分の中にある不純性、多元性、複合性、無境界性」を受け入れる大切さをうつたえている。縦割り型の複雑な社会関係の中に「自分」と「他者」とは何か、その関係がどうあるべきかを深く考えさせる本。

③ 東南アジアへの「接触恐怖」を突破する方法として、戦時中の日本によるフィリピン占領を多面的に考察する。欧米の侵入に痛めつけられたこの二つのナショナリズムの、占領という暴力で形づけられた出会いに焦点を絞り、双方における影と光を探る。本書は、占領された「他人の物語」を通して、占領した「自分の物語」を読み直し、アジア人とのつきあい方の手がかりを教えてくれる。日本之外へ足を運ばなくとも、他者を想像する力、今の自分でかつての自分を笑う能力を培うその技法は実に面白い。

以上の三冊は、その着眼点は異なつても、私たちの無知・無関心に明かりを照らし、日常世界における完結しがちな、行き詰った自分のみの物語を打ち破る力がある。きみたちにぜひ読んでほしい本を三冊あげると

どうやつて
本を手に入れるか？

では、ここであげられている本を手にするにはどうしたらいいのか。「借りる」と「買う」のふたつの場合にわけて、ざつと説明しておきます。

【借りる】

和光大学図書館内に書棚を特設しました。そこに、ここで推薦された本を、それぞれ何冊かずつ置いてあります。場所はカウンターの先、リファレンス・コーナーの入り口のあたりです。

和光大学図書館の特設書棚で借りる。

関連本その他、知りたいことがあれば遠慮せずに図書館員に相談してください。

近所の公共図書館で借りる。

小説や軽いエッセイ集といった比較的やわらかな本は、専門書中心の大学図書館よりも、近所の公共図書館のほうがさがしやすいでしょう。

いまは公共図書館でも目録をオンラインで公開しているところが多いので、図書館に行くまえにインターネットで調べておくと無駄足を踏まずにすみます。

【買う】

新刊書店で買う。

いまは一年に七万五〇〇〇冊の本が出版されています。この数は、いっぽんの書店に扱える量をはるかに越えています。

料はじぶんで負担しなければなりませんが。（友だちと共同で何冊か購入すれば、ほとんどのオンライン書店で送料がタダになります）

古書店（古本屋）で買う。

ふらりと入った古書店で必要とする本をピタリと探せる可能性はほとんどありません。古本屋は「本との偶然の出会い」をたのしむ場と割り切ったほうがいいでしょう。

ただし、山とか映画とか植物などの専門書店のばあいは別です。じぶんが関心のある分野の専門書店をみつけて、そこで入手したい場合はオンライン書店を利用するといい。もちろん送

したがつて、すぐ欲しい場合は、オンライン古書店の利用をすすめます。

複数の古書店が共同でひらいているホームページがいくつもありますから、それをつかえば、たいていの本は見つかると思います。

もちろん、ネット・オークションで

アクセスでもカウンターに持参してくれても、どんなしかたでもかまいません。「私が推薦する本」も歓迎です。そのうちのいくつかを、つぎの小冊子や来春刊行予定の本に掲載させてもらおうと考えています。よろしくお願ひします。

最後にお願いがあります。

この小冊子への感想や希望、あるいは読んだ本の感想など、なんでも図書館あてに送ってください。メールでも

あります。もちろん、ネット・オークションで

やすく入手することもできます。すぐに必要な本にぶつかる可能性はありませんけれどね。

「本を読もう!」ブックリスト②

(2005.1.27現在)

あ行

- 1『eリテールに挑む!』 日本経済新聞社
日本経済新聞社 2000年 1,470円
- 2『遺産相続者たち』 ピエール・ブルデューほか
藤原書店 1997年 2,940円
- 3『意識通信』 森岡正博
筑摩書房《文庫》 2002年 1,155円
- 4『イノベーションのジレンマ』 ク莱頓・クリステンセン
翔泳社 2001年 2,100円
- 5『ウォーホル日記』(上・下) パット・ハケット
文芸春秋《文庫》 1997年 @1,427円
- 6『失われし自我(己)をもとめて』 口口・メイ
誠信書房 1995年 2,520円
- 7『エスキモーに氷を売る』 ジョン・スパールストラ
きこ書房 2000年 1,680円
- 8『エッセンシャルアトラス日本・世界 TVのそばに1冊』
帝国書院 2004年 1,155円
- 9『LD児・ADHD児が蘇る身体運動』 小林芳文
大修館書店 2001年 2,100円

か行

- 10『回想』(上・下) レニ・リーフェンシュタール
文芸春秋《文庫》 1995年 @764～897円
- 11『開発経済学入門』 渡辺利夫
東洋経済新報社 2004年 2,940円

本を読もう!

〔第二集〕

—きみたちに読んでほしい本を3冊あげると—

二〇〇五年三月一五日発行
発行 和光大学附属梅根記念図書館

F T Y 一九五八五八五
A E L .. ○ 四四一九八九七四九四
.. ○ 四四一九八九一三五〇
東京都町田市金井町二二六〇

- 12『拡散』 大倉得史
ミネルヴァ書房 2002年 2,100円
- 13『家計からみる日本経済』 橋木俊詔
岩波書店『新書』 2004年 735円
- 14『からゆきさん』 森崎和江
朝日新聞社『文庫』 1980年 459円
- 15『環境危機をあおってはいけない』 ピヨルン・ロンボルグ
文芸春秋 2003年 4,725円
- 16『環境ビジネス新時代』 牧野昇
経済界 2001年 1,470円
- 17『勤工場の研究』 鈴木英雄
創英社 2001年 3,675円
- 18『記録を残さなかつた男の歴史』 アラン・コルパン
藤原書店 1999年 3,780円
- 19『近代経済学の解明』(上・下) 杉本栄一
岩波書店『文庫』 1981年 @632～785円
- 20『クジラと日本人』 大隅清治
岩波書店『新書』 2003年 735円
- 21『グリム童話集』(全5巻)
岩波書店『文庫』 1979年 @630～735円
- 22『クローディアの秘密』 E.L.カニグズバーグ
岩波書店『文庫』 2000年 714円
- 23『経営者の役割』 C.I.バーナード
ダイヤモンド社 1956年 2,100円
- 24『芸術の意味』 ハーバート・リード
みすず書房 1995年 2,835円
- 25『"劇的"とは』 木下順二
岩波書店『新書』 1995年 663円
- 26『限界芸術論』 鶴見俊輔
筑摩書房『文庫』 1999年 1,365円
- 27『幻談・観画談』 幸田露伴
岩波書店『文庫』 1990年 483円
- 28『幻燈辻馬車』(山田風太郎明治小説全集3,4) 山田風太郎
筑摩書房『文庫』 1997年 @945円
- 29『公共サービスのマーケティング』 ジョン・クロンプトンほか
遊亭創造 1991年 3,990円
- 30『広辞苑』(第五版) 新村出
岩波書店 1998年 7,665円
- 31『コーランを読む』(井筒俊彦著集8) 井筒俊彦
中央公論新社 1991年 6,320円
- 32『こころの旅』 神谷美恵子
日本評論社 1990年 1,575円
- 33『こころのチキンスープ 愛の奇跡の物語』 ジャック・カンフィールドほか
ダイヤモンド社 1995年 1,529円
- 34『コンテンツビジネスマネジメント』 トーマツ
日本経済新聞社 2003年 3,780円
- 35『こんな凄い奴がいた』 長田渚左
文芸春秋『文庫』 2004年 570円

さ行

- 36『最新コーチング読本』 武田建
ベースボール・マガジン社 1997年 1,890円
- 37『坂の上の雲』(全8巻) 司馬遼太郎
文芸春秋『文庫』 1999年 @620円
- 38『ザ・ゴール』 エルヤフ・ゴールドラット
ダイヤモンド社 2001年 1,680円
- 39『さぶ』 山本周五郎
新潮社『文庫』 2002年 660円
- 40『シェイクスピア 言語・欲望・貨幣』 テリー・イーグルトン
平凡社 1992年 2,854円
- 41『仕事常識 新・オトナの学校』 日本経済新聞社
日本経済新聞社 2004年 1,260円

- 42『仕事のなかの曖昧な不安』 玄田有史
中央公論新社 2001年 1,995円
- 43『渋沢栄一』 土屋喬雄
吉川弘文館 1989年 2,100円
- 44『私編岡上風土記稿』 鈴木勁介
八月書館 2003年 2,625円
- 45『社会認識の歩み』 内田義彦
岩波書店《新書》 1983年 735円
- 46『13歳のハローワーク』 村上龍
幻冬舎 2003年 2,730円
- 47『小説の技巧』 デイヴィッド・ロッジ
白水社 1997年 2,520円
- 48『情報と自己組織性の理論』 吉田民人
東京大学出版会 1990年 5,040円
- 49『鈴の音が聞こえる』 田中貴子
淡交社 2001年 2,100円
- 50『スポーツ科学・入門』 別冊宝島編集部
宝島社《文庫》 2000年 630円
- 51『青春漂流』 立花隆
講談社《文庫》 1988年 540円
- 52『世界中の言語を楽しく学ぶ』 井上孝夫
新潮社《新書》 2004年 714円
- 53『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』(上・下) 村上春樹
新潮社《文庫》 1988年 @580～620円
- 54『選択の自由』 ミルトン・フリードマンほか
日本経済新聞社《文庫》 2002年 1,300円
- 55『ソウルの練習問題』 関川夏央
新潮社《文庫》 1988年 580円
- 56『それから』 夏目漱石
新潮社《文庫》 1992年 420円
- 57『大地の子』(全4巻) 山崎豊子
文芸春秋《文庫》 1994年 @610円
- 58『「民が代」齊唱』 鄭瑛恵
岩波書店 2003年 2,940円
- 59『知識社会学と現代』 秋元律郎
早稲田大学出版部 2002年 5,775円
- 60『中国企業の競争力 徹底検証』 安室憲一
日本経済新聞社 2003年 1,890円
- 61『通貨の興亡』 高橋乗宣
PHP研究所 1999年 690円
- 62『デパートを発明した夫婦』 鹿島茂
講談社《新書》 1991年 735円
- 63『テロリストのパラソル』 藤原伊織
講談社《文庫》 1998年 650円
- 64『東京都市計画物語』 越沢明
筑摩書房《文庫》 2001年 1,365円
- 65『東京の地靈(ゲニウス・ロキ)』 鈴木博之
文芸春秋《文庫》 1998年 490円
- 66『説き語り記号論』 山口昌男ほか
国文社 1981年 2,100円
- 67『トロンが拓くユビキタスの世界』 吉田典之
電波新聞社 2004年 1,995円

た行

- 68『ナンセンスの絵本』 エドワード・リア
岩波書店《文庫》 2003年 588円
- 69『日本国の研究』 猪瀬直樹
文芸春秋 1997年 1,300円

な行

70『日本人のしつけは衰退したか』 広田照幸
講談社『新書』 1999年 735円

71『日本のことば遊び』 小林祥次郎
勉誠出版 2004年 3,150円

72『日本の思想』 丸山真男
岩波書店『新書』 1992年 735円

73『日本文化私観』 坂口安吾
講談社『文庫』 1996年 1,103円

74『日本文化私観』 ブルーノ・タウト
講談社『文庫』 1992年 1,155円

は行

75『ハーメルンの笛吹き男』 阿部謹也
筑摩書房『文庫』 1988年 756円

76『ハイエナ資本主義』 中尾茂夫
筑摩書房『新書』 2002年 756円

77『萩原朔太郎詩集』
新潮社『文庫』 1984年 460円

78『芭蕉研究の諸問題』 今栄蔵
笠間書院 2004年 10,500円

79『バッテリー』(全6巻) あさのあつこ
教育画劇 1996～2005年 @1,470～1,680円 角川文庫でも刊行中

80『はてしない物語』(上・下) ミヒヤエル・エンデ
岩波書店 2000年 @756～840円

81『左利きは危険がいっぱい』スタンレー・コーエン
文芸春秋 1994年 2,039円

82『羊の歌』(正・続) 加藤周一
岩波書店『新書』 1968年 @693円

83『不安の世紀から』 辺見庸
角川書店『文庫』 1998年 540円

84『フェアプレイの経済学』 スティーヴン・ランズバーグ
ダイヤモンド社 1998年 1,890円

85『フェルメールの世界』 小林頼子
日本放送出版協会 1999年 1,218円

86『ベッカー教授の経済学ではこう考える』 ゲリー・ベッカーほか
東洋経済新報社 1998年 2,520円

87『ペルサイユのばら』(全5巻) 池田理代子
集英社『文庫』 1994年 @610円

ま行

88『みそひと文字の抒情詩』 小松英雄
笠間書院 2004年 2,940円

89『みみず物語』 小泉英政
コモンズ 2004年 1,890円

90『明治の東京計画』 藤森照信
岩波書店『文庫』 2004年 1,260円

91『モダン・デザイン全史』 海野弘
美術出版社 2002年 3,990円

92『物語・日本人の占領』 津野海太郎
平凡社『ライブライ一』 1999年 1,155円

や行

93『ユートピアだより』 ウィリアム・モ里斯
晶文社 2003年 2,730円

94『ヨーロッパ退屈日記』 伊丹十三
文芸春秋『文庫』 1992年 470円

95『与謝蕪村』 安東次男
講談社『文庫』 1991年 1,020円

96『夜と霧』 ヴィクトール・E. フランクル
みすず書房 2002年 1,575円

ら行

97『ランチタイムの経済学』 スティーヴン・ランズバーグ
日本経済新聞社『文庫』 2004年 900円

98『歴史のための弁明』 マルク・ブロック
岩波書店 2004年 1,995円

99『ロックする哲学』 澤野雅樹
洋泉社 1994年 2,243円

- このリストは『本を読もう！』(第2集)の本文で紹介されている本を、50音順に配列したものです。データは、書名、著者名、出版年、価格の順で記してあります。
- 作品によっては様々な出版年、出版社から出版されていることもありますが、比較的購入しやすいものを優先して掲載しています。
- 価格は税込表示です。「@」は多巻本の単価を表し、また、「@○円～□円」は各巻の価格帯を表します。
- 原則として図書館で所蔵していますが、入手困難につき所蔵できなかったものも数点あります。お困りの際は、図書館カウンターでご相談ください。